

『教行証書類』について(一)

高田短期大学学長 栗原 廣海

一、はじめに

『観無量寿経』の世界」と題し、長期にわたって『観経』を講読してまいりましたが、前回、第二十八回をもって終了させていただきました。

今回から、『教行証書類』の世界」と題し、親鸞聖人の主著である『顕浄土真実教行証書類』を管見させていただきたいと思えます。このテーマを選ばせていただいたのは、前回までの稿がそうであったように、坊守会で講読させていただいているテーマであるからです。

坊守会での講読に『教行証書類』を選択するには、迷いがありました。なぜなら、この書物は、浅学の身にはあまりにも荷が重いからです。今で

には大きな迷いがありました。しかし、恵雲師や普門師の偉業が当時の宗学を刺激し、その後多くの解説書が刊行されて、以後の『教行証書類』理解に大いに資するとともに、明治以後には近代的な手法による研究も進み、今までに多くの研究書・解説書が上梓されています。幸い、私たちはそれらをとおして、まがりなりにも聖人のご意思に触れることができますので、それらをたよりに、坊守会の皆さまとともに『教行証書類』を拝読する決意をしたのでした。

本稿では、坊守会での講読をもとに、その後の学びもふまえて筆を進めさせていただきたいと思えます。

二、避けたい「教行信証」という略称

さて、本稿のテーマには、「教行証書類」という略称を使っています。しかし、一般的には「教行信証」と言い、ほとんどの人がこの略

こそこの書物の解説書は、江戸宗学の時代のものも含めて数多くありますが、宗学興起の時代には、存覚上人の『教行信証六要鈔』以外になく、この時代に執筆された解説書は「正信偈」や「和讃」が中心だったようです。なぜなら、この時期の宗学が、研鑽不十分でいまだ十分に深められていなかったがために、その研究対象を『教行証書類』にまで伸張することは困難だったからと推察できます。

高田派には『教行証書類』の古い解説書として恵雲師の『教行信証鈔』十五卷や普門師の『師資發覆鈔』二百五十卷がありますが、これらは『教行証書類』研究の先駆的な偉業であり、宗学史上特筆大書すべきであると西谷順誓氏は述べておられます。

このような事実も示すほどに、『教行証書類』は難解な書物ですから、講読のテーマとすること称を用いています。聖人がお付けになった書物名は『顕浄土真実教行証書類』ですから、単純に考えれば、「教行証」または「教行証書類」と略称するのが当然ということになるのでしょうか。ところが、この書物の構成は、

- 顕浄土真実教書類一
- 顕浄土真実行文類二
- 顕浄土真実信書類三
- 顕浄土真実証書類四
- 顕浄土真仏土書類五
- 顕浄土方便化身土書類六

となっていて、「行文類」と「証書類」の間に「信書類」が置かれています。そして「教書類」の冒頭には、

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。

と述べられ、浄土の真実の教えは、往相と還相という二種の弥陀の本願力回向に基いて、「教」「行」「信」「証」の四法であらわされることが示されています。このことから、「教行信証」という略称が誕生したわけで、このように略称された最初の方は親鸞聖人の曾孫に当たられる覚如上人のようです。

聖人の直弟で、高田派の二世真仏上人の『経釈文聞書』には、「行文類」からの抜粋において、「親鸞聖人曰 教行証言」と言い、「教行証」の略称を用いておられますし、高田派第三世の顕智上人も、『抄出』において、『教行証文類』からの抜粋をされるところで、「教行証云」と言い、また『聞書』においても、「化身土文類」からの抜粋に際し、「教行証六云」と記しておられます。親鸞聖人面授の直弟のお二人が「教行証」とおっしゃっていることは、聖人が『顕浄

な意図とは何かと言いますと、それは、仏道の枠組みは「教」「行」「証」の三法で示されるものであるからということになると思います。仏教学者で、真宗についても多くの示唆に富む提言をしておられる上田義文氏は、

法然から受け継いだ選擇本願の念仏道を、「教行証」という仏教の根本的な綱格に当て嵌めて、旧来の仏教界に対して、宗教哲学的な根拠付けを提示した。

と言われ、また、念仏往生の教は、単に既成の仏教界が非難するような邪教ではないというだけではなく、旧来の仏教を超えて、それらがなし得ないことまでなし得る真の仏教（真宗）、いわば仏教中の仏教であるということを主張したのである。

と言われます。そして、

土真実教行証文類』を略称されるときも、やはり「教行証」とおっしゃっていたのであると拝察できるのではないかと思えます。

そもそも、聖人が、浄土真実の教えが「教」「行」「信」「証」の四法であらわされるとされ、主要本論も「教文類」「行文類」「信文類」「証文類」の四つの巻で構成されているにもかかわらず、「序」の中では、

真宗の教行証を敬信して、ことに如来の恩徳の深きことを知んぬ。

とおっしゃっていること、またいわゆる「後序」において、

ひそかにおもんみれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま盛んなり。

とおっしゃっていることを勘案しますと、聖人は明確な意図のもとに、「信」を入れない題名をお付けたのだと考えるのが妥当でしょう。では明確

もし「信」を入れて「教行信証」とすると、仏教一般を意味するものとはならず、単に浄土宗あるいは浄土真宗を意味するにすぎないものとなる。それでは大きな努力をしてこの書を世に送る親鸞の意図―大乘は一乗であり、それは唯だ誓願一仏乗である（これこそが真の成仏の教えである）―は表現されない。だから題名は必ず「教行証文類」でなければならぬのである。（上田義文著『親鸞の思想構造』）

と結論されます。首肯すべき智見であると思えます。

「高田教学」は、宗祖親鸞聖人にそのみ教えを直接訊ねる教学です。私たち高田門徒は、一般化し、高校の日本史等の教科書にも出てくる「教行信証」という略称の使用は控え、「教行証文類」または「教行証」と略称したいものです。